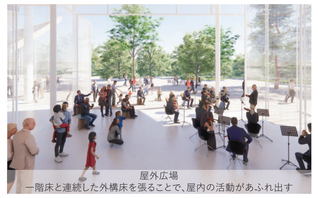
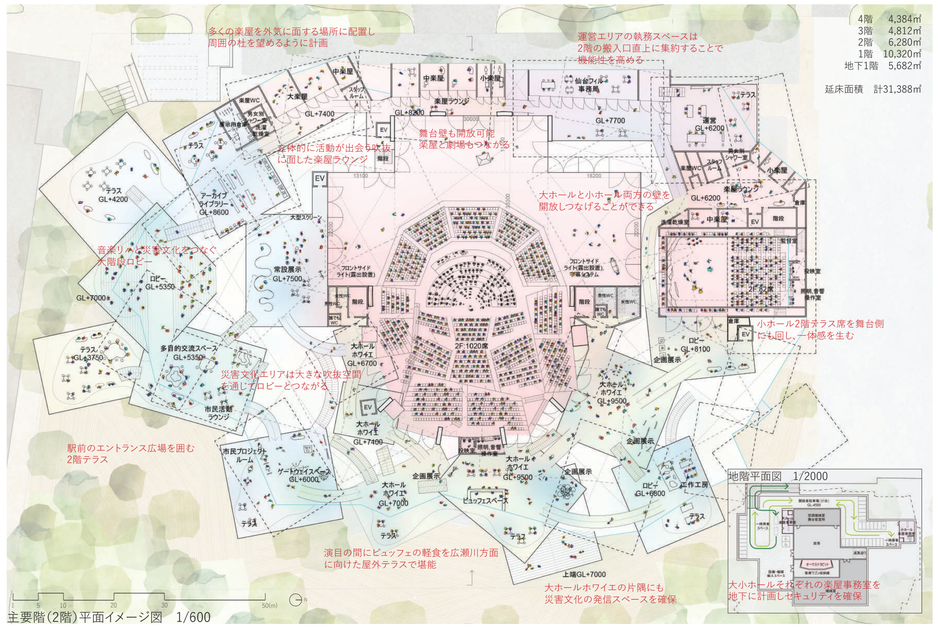
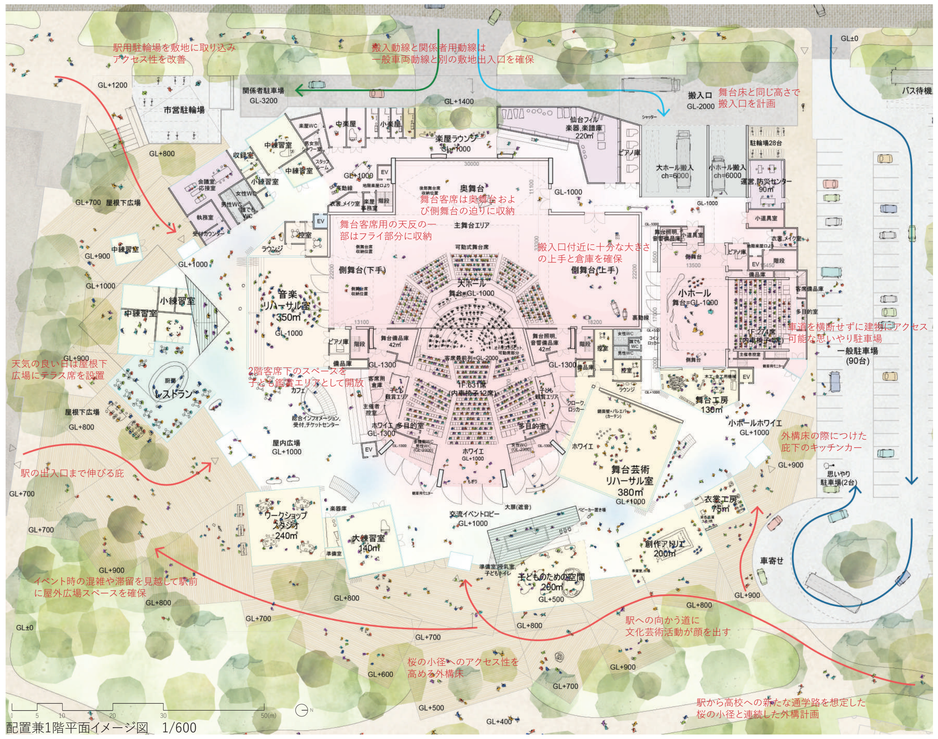
エントランスロビー
全ての人に開かれた広場、様々な活動に迎えられる

音楽リハーサル室
仙台フィルの演奏・ロビーの大階段が観客席になる


屋外広場
一階床と連続した外構床を張ることで、屋内の活動があふれ出す

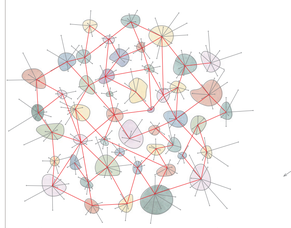
クワイエットスペース
上階のテラス際で広大な風景に開かれた静かな居場所を作る

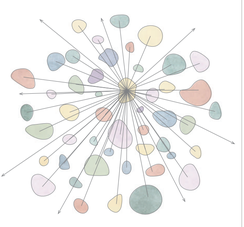


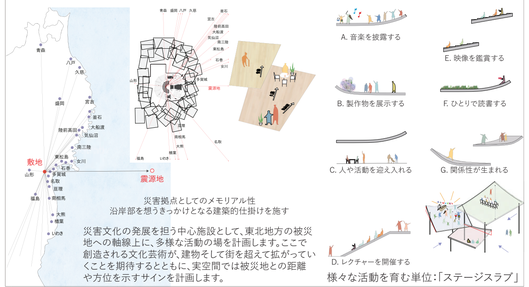


00. 多様な記憶と活動がつながる場所

東日本大震災をはじめ、広域的で複合的な出来事は、一括りにできない固有の経験として刻まれます。私たちは、その推し量れない多様さの先に、個を重んじながら連帯していく重要さを学び、未来へ歩みを進めてきました。「多様な活動が共存し響き合う」ことと「ひとつのことを創り出し拡がる」ことが連鎖していくことで、過去と未来がつながり、人を、文化を、まちを育んでいく、杜の都の新たなシンボルをつくります。


多様な活動が共存し響き合う


ひとつのことを創り出し拡がる



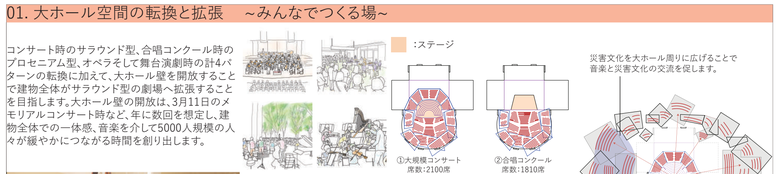
災害拠点としてのメモリアル性
沿岸部を想うきっかけとなる建築的仕掛けを施す

災害文化の発展を担う中心施設として、東北地方の被災地への軸線上に、多様な活動の場を計画します。ここで創造される文化芸術が、建物そして街を超えて拡がっていくことを期待するとともに、実空間では被災地との距離や方位を示すサインを計画します。

様々な活動を育む単位:「ステージスラブ」

01. 大ホール空間の転換と拡張 ～みんなでつくる場～

コンサート時のサラウンド型、合唱コンクール時のプロセニアム型、オペラそして舞台演劇時の計4パターンの転換に加えて、大ホール壁を開放することで建物全体がサラウンド型の劇場へ拡張することを目指します。大ホール壁の開放は、3月11日のメモリアルコンサート時など、年に数回を想定し、建物全体での一体感、音楽を介して5000人規模の人々が緩やかにつながる時間を創り出します。



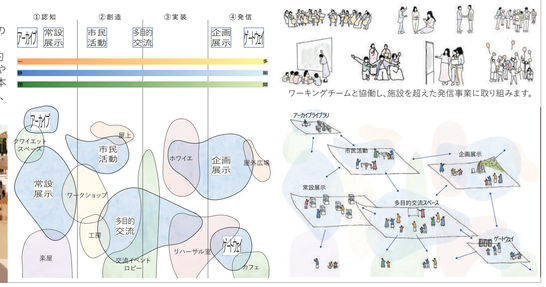
広場エリア
様々な活動が響き合う文化芸術の交流ロビー

市民協働によって、まちで育ってきた仙台の文化芸術活動。プロとアマが共存し、年齢制限が無く、国内外から様々な参加者がいる、音楽を通じて開かれたつながりこそが、仙台で育まれてきた、人と文化の価値ある関係性であると言えます。

02. 日常的な活動と溶け合う災害文化 ～立体的に広がる関係性～

多様な主体が利用・交流し、災害文化を創造する場とするために、①認知 ②創造 ③実装 ④発信 の機能をグラデーショナルに配置し、活動の有機的な連動を図ります。災害文化エリア全体が、立体的に開かれた場として構成されることで、文化芸術やロビーに関するプログラムが溶け合います。東日本大震災という出来事と、来場者ごとの心の距離に、選択肢が生まれるような建物計画を図ります。

中心部震災メモリアル拠点
災害文化事業どうしが連立しながらもつながり合う

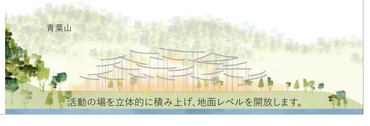


03. 仙台の杜から学ぶ ～100年後のランドスケープ～

伊達政宗が築いた仙台城は、崖や裏山など、すでにある場所の特性を踏まえた都市空間を作り出していました。また、各屋敷の庭に植えた木々の集まりが、やがて杜の都を築いたように、時間を掛けて周囲の環境と調和していく視点を、本計画に取り込みます。リジェネラティブデザインの考えの下、時間を掛けてこの場所の環境に調和していくことで、100年後のランドスケープをデザインします。

仲の瀬橋からの眺望
細分化したスラブがボトルのヴォリューム感を経減する

現況敷地の広場的特性を引き継いだ計画とすることで、青葉山エリアの玄関口として人々を迎え入れ、周辺施設へ回遊するための機能を担います。



活動の場を立体的に積み上げ、地面レベルを開放します。

04. 各種素材について

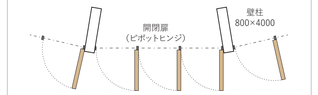
災害文化にまつわる活動を支えるスラブを、被災地の木材で仕上げます。青森のヒバ、岩手のカラマツ、福島のナラなど、ホールを超えて響く音が、被災地の空気や水分を含んだ木材に触れることを狙います。

玉虫塗
出展元:東北工芸製作所

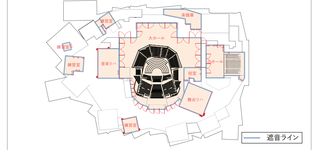
仙台平
出展元:仙台平

客席は、被災地から集めてきた木材を下地として、仙台の伝統工芸である「玉虫塗」を用い、シート生地は「仙台平」を使用します。

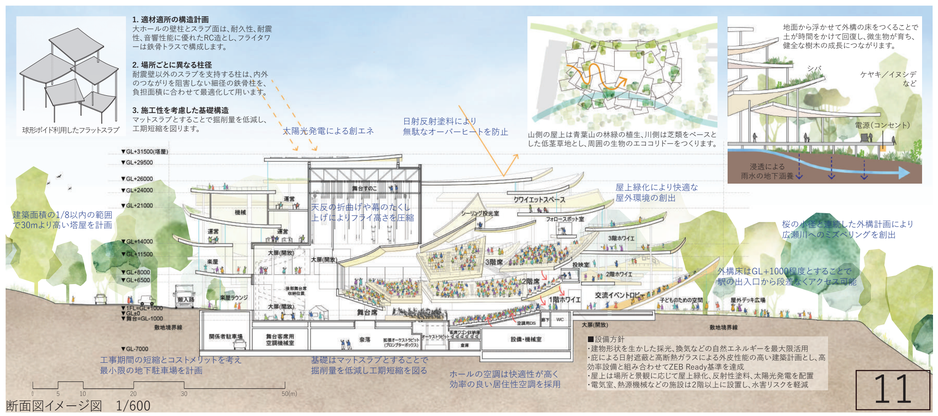
05. ホール壁の開口と遮音



大ホールの壁柱間を大扉で構成します。大扉は片開き戸とし、壁構成や扉間の納まりを工夫することで、閉鎖時の遮音性能を確保します。



各部屋ごとに遮音ラインを取り、部屋間での音の干渉を防止します。

大ホール内部空間
ホール壁が開放されることで、施設全体が音楽を通じて拡がっていく

駅側外観
被災地の様々な場所から集めてきた材木で構成された軒天が人々を迎え入れる